

【参考】 羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語

〔今昔物語集〕卷二十九第十八

今は昔、¹摂津の国の辺^{ほとり}より、盗みせむがために京に上^{のほ}りける男^{をのこ}の、日のいまだ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立^たりけるに、²朱雀^{すざく}の方に人しげくありきければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立^たりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層⁴にやはらかかつり登³りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。

盗人、「怪し。」と思ひて、⁵連子^{れんじ}よりのぞきければ、若き女の、死にて臥^ふしたるあり。その枕上^{まくらがみ}に火をともして、年いみじく老いたる^{おきな}の、白髪^{しろがみ}白きが、その死人の枕上^{まくらがみ}にゐて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

盗人これを見るに、⁶心も得ねば、「これはもし鬼⁷にやあらむ。」と思ひておそろしけれども、「もし死人にてもぞある、おどして試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「己は、己は。」と言ひて走り寄りければ、⁹嬭^{うな}、手まどひをして、手を摺^すりてまどへば、盗人、「こは何ぞの嬭のかくはしゐたるぞ。」と問ひければ、⁸嬭、「己が主にておはしましつる人の失せたまへるを、あつかふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。その御髪^{おほむかみ}の長に余りて長ければ、それを抜き取りて髪にせむとて抜くなり。助けたまへ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と嬭の着たる衣と、抜き取りてある髪とを奪^はひ取りて、下^おり走りて逃げて去りにけり。

さてその上の層^{こゝば}には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたるひとの、¹¹葬^{はなづか}りなどえせぬをば、この門の上^{うへ}にぞ置きける。

このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたとや。

15

10

5

1 摂津の国 大阪府北西部と兵庫東南部の古い国名。「せつつ」。

2 朱雀 朱雀大路。

3 山城 京都府南部の古い国名。こは、都の外、

羅城門の南側をさす。

4 やはらかかつり登りたりけるに そつとよじ登つたところ。

5 連子 縦または横に細木や竹を打ち付けた窓。

6 心も得ねば 納得がいかないので。

7 鬼 当時、羅城門には鬼が住むと考えられていた。

8 死人 こは、死者の霊の意か。

9 手まどひ うろたえて、思うように手が使えないこと。慌てふためくこと。

10 長に余りて長ければ 背丈以上に長いので。

11 葬りなどえせぬ 葬儀などできない死者。